

半分が氣に入らぬのかを自然に知れるやうにした。

伯父は、客人への此無禮を氣が付かず、なほも愛想よく話を續けて、

「わしには、結局かう思はれるのだ。話が、馬から人間の事に移つたが、ごどのつまり、かう思はれるのだ。失敗と違犯との差異といふ事になるのだ。爲よと命じてその最劣等の結果は失敗であるが、爲てはならぬといつてその最悪の結果は違犯になる。人は部分的失敗を力に生きて行くもので、失敗が努力の端緒になり、努力を誘引する。行つて見て、仕損ふ。一層の決意と、力と、經驗とをもつて失敗を拭ひ去つて、先へ乗り越す。後になつて過去を見返つて、その仕損じを笑ひ、且懐かしく思ふ。失敗が、過去の自分と、今の自分とを測る尺度になるのだから。……失敗は向上の途なのだ。

それが違犯となると、全く反對で。およそ違犯と名のつくものに發育成長を意味するものはない。一つの違犯はそれだけの死で、違犯から勝利を無理にでも得る事は出来ぬ……違犯といふものが最後の敗北であるから。そして敗北したものは、何かといへば人の意志なのである。違犯ごとにそれだけつづつ意志は殺されるので、違犯は、人を弱め、失望させ、屈辱させ、苦悶させ、毒害する。……違犯の途は下へ向いてついでゐる。」

彼は立ち上つた。同時に客も。彼はまた言つた。

「厩へ来たまへ。君に逸物を御目に懸ける。その馬はいやな暗示を受けた事は一度もないんで、この農場を樂園だと思つて居るよ。わしが教へた五つの重なる事は、意志を強くする事、走る力を増すこと、忍耐力を養ふ事、自尊心を持つこと、愛情を發達させる事とで、……實に駿馬だ……」

大正五年十二月廿八日印刷
大正六年一月二日發行

(非賣品)

發行所 東京市女子高等師範學校内
文科學術談話會

編輯兼發行人 東京市赤坂區新坂町六十八番地八號
千葉安良

印刷者 東京市神田區旅籠町二丁目十二番地
畑桂之助

印刷所 前同所
廣業館

(電話下谷五五七番)